

『忠度集』の花と月の歌

瀬 良 基 樹

一

『忠度集』の花の歌は六首、月の歌は十一首ある。そのうち、自然視照詠としての花の歌と月の歌は主題が同じものが相互に対応するように配列してあり、両者は有機的に関連し合いながら全体として深い余情を湛えた美の世界を創造している。

花の歌と月の歌を主題別に分類する（漢数字は歌の番号）と、

(1)、月への一途な愛着心を詠んだもの

四一、四二、四四

(2)、花と月を女に喩えて、それらへの恋情を歌ったもの

(花) 一一 (月) 四三

(3)、花と月の絵画的なイメージを表現したもの

(花) 一三 (月) 三二、四五、五七

(4)、花と月の美質を趣向を凝らして捉えたもの

(花) 一四、八二 (月) 四六、六六

(5)、花と月から触発された懐旧の情をテーマにしたもの

(6)、花と月を人事詠と結びつけて取り上げたもの

(花) 一六 (月) 八四

となる。ここでは、『忠度集』の(1)～(5)の自然を視照した花と月の歌をこの主題に沿って取り上げて、その自然視、和歌視の特色を内容と表現の面から見てみようと思う。

なお、和歌本文の引用は、『新編国歌大観』に拠った。ただし、『万葉集』は、『新編日本古典文学全集万葉集』を用いた。

二

(1) 花の歌は自然詠が五首、人事詠が一首である。

(2) 桜

12をしみかねちる花ごとにくふれば心もかぜにさそはれにけり

この歌は、次の歌の影響を受けている。

桜

山ざくら千千に心のくだくるはちる花」とにそふにや有るらん

(堀河百首、一四六、匡房。千載集、

八四。江師集、初句「ちるたびに」、四句「はなびらごと」)

この匡房の歌の本歌は、木船重暉氏が指摘されているように、

やよひのつごもり日、花つみよりかへりける女どもを見て

よめる

とどむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにかくふころ
か (古今集、卷二、春歌下、一三三、みつね)

である。散る花を惜しむ気持ちが強まると、匡房の歌にもあるように、心が様々に乱れるのであった。

ところで躬恒や匡房の歌は、散る花と心を取り合わせているが、忠度の歌はさらに風をアレンジしてある。このような歌には、

内裏に百首歌たてまつりし時、落花

うしとおもふ風にぞやがてさそはるるちり行く花をしたふ心は

(新後撰集、卷二、春歌下、二二五、遊義門院権大納言)

よしさらばたぐふ心をちる花にそへてもさそへ春の山かぜ

(延文百首、八一七、尊道)

などがある。忠度の歌の「心もかぜにさそはれ」というのは、

花の歌の中に

見る人のをしむころやまさるとて花をばかぜのちらすなりけり
(風雅集、卷三、春歌下、二二三、二条院参河内侍)

と歌われているように、風が花を散らせば散らすほど散る花を愛

惜する心がますます募っていくことを言っている。この点で、心は花と重なり合っている。前述した躬恒の歌の詞書きから花は女の比喩で、この歌の背景には女への強い慕情も歌われている。

(3) 13 みよしのの花さきにけりつねよりもあさる雲のはるまも

なき

『万葉集』に歌われた吉野の地は吉野離宮の置かれた聖地で、

人麻呂や赤人らの宮廷歌人が天皇行幸の地として賛歌を詠んでいる。平安朝になると吉野山と桜を結びつけた歌が出現するが、片

桐洋一氏によると、三代集時代の例は多いとは言えず、「吉野山と桜との関係が決定的なものになる」のは「西行とその時代」だと述べられている。^(注)

ところで、吉野山の花を雲に見立てた歌には、

み吉野のよしのの山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ

(後撰集、卷三、春下、一一七、よみ人しらず)

などがあり、忠度の歌に出てくる「ある雲」は、

滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむと我が思はなくて

(万葉集、卷三、二四二、弓削皇子。夫木抄)

と詠まれて、動かずに柳引いている雲を表すが、花をそれに見立てた歌の出現は平安後期からである。

山たかみあさる雲と見えつるはよのまにさける桜なりけり

(玉葉集、卷二、春歌下、一三九、祝都成仲)

結局忠度の歌は、花を雲に見立てながら、

……吉野の宮は山高み雲そたなびく川速み瀬の音そ清き神さび
て見れば貴く宜しなへ見ればさやけしこの山の尺きはのみこそ
この川の絶えばのみこそもしきの大宮所止む時もあらめ

(万葉集、巻六、一〇〇五、山部赤人)

と詠まれてるように、全山桜に覆われて、朝常に雲がかかっ
ているように見える吉野山の秀麗な姿を絵画的に捉えて賛美して
いる。

(4)ア 賀茂歌合に、花をよめる

14木のもとをやがてすみかとなさじとておもひがほにや花はち
るらん (月詣和歌集、巻二、二月、一二三。別雷社歌合)

この歌の本歌は、次の歌である。

修行にいでさせたまひけるとき、はなのもとにてよませたま
へる

このもとをすみかとすればおのづからはなみる人になりぬべき
かな

(金葉集三奏本、第一、春、四)

九、花山院。詞花集、巻九、雑上、二七六、四句、「はなみる人
と」。和漢朗詠集、五句「なりにけるかな」。古来風体抄等)

この花山院の歌は、人が山中の木の下で修行の身として過ごす
自分を花を觀賞する人と見紛う諧謔を主題としている。この歌の
本歌取りの歌は大式高遠や行尊や西行も詠んでいるが、他にも、

宝治元年百首歌に、見花

尋ねてぞ花をもみまし木のもとをすみかともせぬ我が身なりせ
ば

(新拾遺集、巻二、春歌下、一二四、藤原光俊朝臣。宝治百首)

などがあり、一夜の旅寝の風流として花の下で過ごすことは古来
あった。

忠度の歌は、『別雷社歌合』では寂蓮とつがわされて負けとなっ
ている。判者俊成はこの歌について、「やがて住家となさじとて
といへる、えむにこそ侍るめれ」と評している。結局この歌は、
花を擬人化しながら、花が散るのは木の下に住家がみやびを求め
る人の遊びのための場所ではなく、修行のための場所であること
を説諭するからだとユーモラスに表現して、耽美的な気分を高め
ている。

(イ) ある所の屏風の絵に、あれたる家に老人花みたるころを

人人よみ侍りしに

82なづさひしむかしにあらずふりぬるをしらぬおきなど花やみ
るらん

「しらぬおきな」という表現は、次の歌による。

ますかがみそこなるかげにむかひみて見る時にこそしらぬおき
なにあふ心地すれ (拾遺集、巻九、雑)

下、旋頭歌、五六五。古今和歌六帖、作者みつね。和漢朗詠集)

この歌は、鏡に映った自分の老いた姿があまりにも自分らしくな
いという嘆きを詠んでいる。この表現を用いた歌には、

老後述懐

……いたづらにすぐる月日はもとゆひのふかむらさきのしもとなりおもてにたたむしらなみのしらぬおきなになりはてて……

(江帥集、三二四)

住吉社歌合に、述懐を

わがさかりやよいづかたへゆきにけんしらぬおきなに身をばゆづりて (万代和歌集、三六九六、清輔朝臣。夫木和歌抄)

などのような直接的に老残の身を嘆く歌もあるが、忠度の歌は、

さくらの花のもとにて年のおいぬることをなげきてよめる

いろもかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

(古今集、卷一、春歌上、五七、きのともものり)

の歌と内容的に通じている。

かしらおろしてのち、東山のはなみ侍りけるに、円城寺のは

なおもしろかりけるをみて、よみ侍りける

いにしへにははらざりけり山ざくら花は我をばいかがみるらん

(千載集、卷十七、雑歌中、一〇五五、前中納言基長)

の刺髪による変身に対して、花を擬人化して老人がそれに慣れ親しんでいた昔と疎遠な間柄である今とを対比しながら、人生の無常さへの嘆きを対象化して訴えようとしている。

三

次に、月の歌は自然観照詠十首、人事詠一首である。

(1)ア 月

41よひのままもそらやはかはるいかなればふけゆくま月に月のすむらん

『新日本古典文学大系詞花集』は、次の九六の歌について九五の歌と「同想、」とし、類歌としてこの忠度の歌をあげている。

題不知

いかなればおなじそらなる月かげのあきしもことにてりまさるらん

(詞花

集、卷三、秋、九五、右大臣。後葉和歌集。中宮亮頭輔家歌合)

家に歌合し侍りけるによめる

はるなつはそらやはかはるあきのよの月しもいかでてりまさるらん

(詞花集、卷三、秋、九六、左衛門督家成)

前者について『中宮亮頭輔家歌合』の判者基後は、「姿ごと葉共にうるはしく見所侍るめり、おなじ空なるなどいへる詞、秋しもことにといへるわたり、いにしへに恥ぢたるなども聞え侍らず」と判詞を述べて、「そら」については「おなじ」と概念的に把握しながら、「月かげ」については「あき」と具体的に捉えた対比表現に注目している。後者は「そら」も「月」も具体的な季節をあげている。両者共に一年間を通して変わらぬ空に対して秋が格別な月光や月の現象的な相違に着目しているが、忠度の歌は一日の中の「よひのま」と夜更けにおける「そら」と「月」の現象の違いに焦点を当てている。

これらの歌は、

奈良花林院歌合に月をよめる

いかなれば秋はひかりのまさるらむおなじみかさの山のはの月

(金葉集、二度本、卷三、秋部、二〇二)

権僧正永縁。永縁奈良房歌合、初句「いかにして」。古來風体抄)

や、その本歌、

寛和元年八月十日内裏歌合によみ侍りける

いつもみる月ぞとおもへどあきのよはいかなるかげをそふるなるらん

(後拾遺集、第四、秋上、二五六)

藤原長能。公任集、二句「月ぞと思ふに」。内裏歌合)

の影響を受けている。これらの歌の「いかなれば……らむ」、「いかで……らむ」という疑問形は、白問しながらその自然現象の特殊さを提起する形になっている。

結局忠度の歌は、「月かげは山のはいつるよひよりもふけゆくそらぞてりまさりける」(後拾遺集、八三七、大藏卿長房)の歌のような時間的経過に伴う月光の変化を単純に捉えたものではなく、秋の夜更けという時間が月明に与える影響の大きさに驚嘆している。

(イ)42月かげはいつことわかじものゆゑにやどに心のとまらざるら

む

「いつこと……わかじ」は、

いつことも春のひかりはわかなくにまだみよしのの山は雪ふる

(後撰集、卷一、春上、一九、みつね)

のように用いられて、どこであつても場所を選ばない意を表わしている。忠度の歌は、

月

いつくとも月はわかじをいかなればさやけかるらむさらしなの

山

河百首、七九七、隆源。千載集、二七七、初句「いつこにも」

の影響を受けており、上の句に月光の照射の普遍平等性を条件としてあげている。忠度の歌の下の句の「やどに心のとまらざるらむ」も、「とまる」が「やど」の縁語として用いられている。このような表現も前例がある。

かぎりなくさやけき月を詠むれば宿に心ぞとまらざりける

(或所歌合、天喜四年四月、一一三)

忠度の歌も、月光の澄澄さに誘われて、家の中では心が落ち着かず外出して至る所を訪ねて、月光の場所を選ばない輝きに触れようとする耽美的な気分を詠んでいる。

(ウ) 野径月

44月かげのいるをかぎりにわけゆけばいつこかつまり野原しの

はら

歌題の「野径月」は、忠通や広言、藤原良経らの歌に見られ、

野原の中の古道で見た月を取り上げている。忠度の歌の「野原し

のはら」は、『催馬楽』に、

更衣

更衣せむや さきむだちや 我が衣は 野原篠原 萩の花摺や
さきむだちや

と歌われており、また、

旅

まだしらぬたびの道にぞ出でにける野原しの原人にとひとつ

〔堀河百首、一四五八、匡房。新勅撰集、五一五〕

と詠まれているように、人跡稀な広大な草原であった。

「いづくかとまり」は、『万葉集』では、

照る月を曇しそ島陰に我が船泊てむ泊まり知らずも

〔巻九、一七一九、春日蔵。統千載集、七七七、読人不知、四〕

句「わが舟よせむ」。家持集、一六九、四句「わがふねとめん」のように、「泊まり知らずも」と用いられている。一方「源氏物語」では、

浮島を漕ぎ離れても行く方やいづくとまりと知らずもあるかな

〔玉鬘、兵部の君〕

と「いづくとまり」の形で使われて、忠度の歌に影響を与えている。

結局忠度の歌は、

五十首歌たてまつりし時、野径月

ゆくすゑは空もひとつの武蔵野に草の原よりいづる月かけ

〔新古今集、巻四、秋歌上、四二二、摂政太政大臣〕

の大草原から昇る月に向かつてゆく旅の光景に對して、沈む月を追って遙かに続く野原篠原の中をどこまでも旅を続ける様を詠んでいる。月は、心細い旅人の気持ちを励ます道連れでもあった。

(2) おほがののたか葉かりしきさぬるよはのちもしのべとすめる

月かな

「おほがの」は「大我の野」の意で、『万葉集全釈』の『万葉集』巻九の一六七七の歌の注釈に「紀伊国名所図会」を引いて、現和歌山県橋本市の相賀台という広野を言うとある。

「たか葉かりしきさぬ」も、『万葉集』を受けた旅寝の様子を述べた表現である。『万葉集』には、

大宝元年辛丑の冬十月に、太上天皇・大行天皇、紀伊国に幸

せる時の歌十三首

大和には聞こえ行かぬか大我野の竹葉刈り敷き履りせりとは

〔巻九、一六七七、

作者未詳。夫木和歌抄、九七三七、二句「きこえもゆくか」〕

と詠まれている。「さぬる」の「さ」は接頭語で、「さ寝」は『万葉集』で男女の共寝を言う場合に多用されている。このように忠度の歌の表現は『万葉集』の歌によっているが、内容的には次の歌に通じている。

旅恋

立ちかへり駒の行きかふほどならばたかばかりしき独ねましや

(堀河百首、一二二九、国信)

「のちのぶ」も月と結びつけた例をあげると、

恋の歌の中に

もろともに見てしもかなし夜半の月後忍ぶべき影と思へば

(新統古今)

集、卷十三、恋歌三、一二八六、後一条入道前関白左大臣女

と詠まれ、後で心の中で思い起す意で使われている。

結局忠度の歌は、月を擬人化して女として見て、清澄な月を共寝の相手として大我の野で旅寝した今夜は後になつてもしみじみと思ひ出すことだろうと言つて、旅の恋をいとおしんでいる。

(3)ア) 月前草花

32萩が花たをればぬるる袖にさへ露をしたひてやどる月かけ

(月詣和歌集、卷七、七月、六六〇。治承三十六人歌合)

袖が露に濡れながら萩の花を手折る行為は、

露けてわが衣手はぬれぬとも折りてをゆかん秋はぎの花

(拾遺集、卷三、秋、一八二、みつね)

などの前例がある。一方、忠度の歌の下の句の「袖の露」は涙の意ではなく、

前斎宮にまわりて人人物申しけるに、萩の露に月のやどりて

おもしろく見えければ

秋はぎのしたばに月のやどらずはあけてや露のかずをしらまし

(散木奇歌集、四九二。続古今集、三二六、俊頼朝臣)

の歌と同じく、実際の露である。

『為忠家初度百首』には「若上露」が題として設けられてそれに宿る月が詠まれ、また『為忠家後度百首』には「露上月」の題も採られて、「はちす」、「をぎさはらのすゑば」、「あさちはら」、「く

さのは」、「のばら」などに置く露に宿る月も歌われており、白い

露と黄色い月光が映じ合う印象的な美しさが捉えられている。

後頼の歌の萩の下葉に置く露に映る月光に対して忠度の歌は、

「露をしたひて」と擬人法を用いながら、萩の花の上に置く露に

映る月光ばかりか、萩の花を折る袖を濡らす露にまでも映る月光を捉えて、露の白、萩の花や月光の黄色といった、対比によつて

一層際立つ色彩の美しさに感動している。

(イ) 関路月

45月かけもうつしとどめつあふさかの関のし水のなにこそ有り

けれ

「逢坂の関の清水」を詠んだ早い歌としては、

延喜御時月次御屏風に

あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま

(拾遺集、卷三、秋、一七〇。つらゆき)

のように、望月の駒と結びつけたものもあるが、数は少ない。

平安末期になると、『堀河百首』に「駒迎」や「関」が、また『為

忠家初度百首』には「深夜駒迎」が題として掲げられ、逢坂関を

取り上げた歌が盛んに作られるようになった。忠度の歌のように、

「関の清水」と月を取り合わせた歌は、

相坂の関のし水のなかりせばいかでか月の影をとめまし

(続拾遺集、巻四、秋歌上、二九五、左京大夫顯輔)

逢坂の関の清水にやどりてや今夜の月は名をとめけん

(玄玉和歌集、四二九、尋玄法師)

などがあり、忠度の歌も尋玄法師の歌と内容的に通じており、「あふさかの関のし水は月かけもうつしとどめつるなこそ有りけれ」の倒置で、名所の名の謂れを説明した形を取っている。そして、関の清水がその各に違わず明るい月光を映し出す清澄さを称えている。

(ウ) 月前千鳥

57小夜ふけて月かけさむみ玉のうらのはなれこじまに千どりな

くなり (万代和歌集、一四三七。夫木和歌抄、六八八〇)

千鳥は『万葉集』で河瀬で鳴く身近な鳥として親しまれている。

平安朝に入ると、寒風を受けて夜鳴く面が強調されてくる。

題しらず

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなくなり

(拾遺集、巻四、

冬、二二四、つらゆき。古今和歌六帖。和漢朗詠集。貫之集)

冬十首

よさのうらのまつかぜさむみねざめするありあけのそらにちどりなくなり
(忠盛集、五九)

旅宿千鳥

なるみがたしほ風さむみね覚する浪の枕に千鳥なくなり

(今撰和歌

集、冬、一〇〇、顯昭。治承三十六人歌合。三百六十番歌合)

ところで、忠度の歌は「月かけさむみ」と詠んでいる。丹羽博之氏は、漢詩において月光は「清、冷」と表現され、「寒」と表現するのはそれほど多くないと述べられている。和歌で月光を明確に「寒し」と表現したのは、次の歌が最初である。

百首うたよみはべりしに、千鳥を

ありあけの月かけさむみにはがたおきのしらすにちどりなくなり
(林葉和歌集、六五八。万代和歌集。夫木和歌抄)

この歌は「おきのしらす」の白が月光と映じ合って冬の夜明けの寒々とした印象を強めている。さらに千鳥の声が加わって、冷涼感は一挙に増大していく。

忠度の歌は俊忠の歌の「なにはがたおきのしらす」に対して、「玉のうらのはなれこじま」という『万葉集』に歌われた地名を詠み込んでいるところに特色がある。これについては、『万葉集注釈』の『万葉集』巻七の二二〇二の歌の訓釈にも、「勝浦の南、下里町に粉白があり、その入海を今も玉の浦と呼んでいる」と説明されている。視覚、聴覚、触覚を働かせて捉えた「玉のうらのはなれこじま」の深夜の冴えわたって荒涼とした光景は、忠度の憂悶や悲憤の深さを表わす心象風景でもあろう。

(4) (7) 九月十三夜

46をしよういへど秋のなかばの月はなほこよひもありとおもひな

されき

『万葉集』以来、月を惜しむのは月が山に入る場合が多い。八月十五夜については、その名を惜しむとする歌が見られる。

閏九月あるとしの八月十五夜をよめる

秋はなほのこりおほかるとしなれどこよひの月はなこそをしけれ
(金葉集、二度本、巻三、秋部、一八六、春宮大夫公実)

一方、九月十三夜の月は、

延喜十九年九月十三日御屏風に、月にのりて氈溼漉

ももしきの大宮ながらやそしまを見る心地する秋のよの月

(拾遺集、巻十七、雑秋、一一〇六、よみ人しらず)

と詠まれて以来、その月明の美しさを秋の半ばの月と対比しながら歌われてきた。

九月十三夜歌林苑

なが月のもち月しもはいかなれば影を今夜にゆづり初めけん

(林葉集、四九五)

十三夜月

もちをのみさかりとみるになが月はふたよもたらでくまなかり

けり

(為忠家初度百首、四二五、順政)

忠度の歌は、一句と二、三句が倒置した形で、秋の半ばの月は失われるのが惜しいとは言っても、依然として今夜の九月十三夜

の月はその延長線上にあると思われるほど明ると述べて、両者

を重ね合わせながら今夜の月の美しさを賞賛している。八月十五夜の月を主役とし、今宵の月はその代役をしていると見ている。

(1) 月前恋

66月かげやふかき恋路のしるべなるながむるままにおもひいりぬる

歌意は、月光は深い泥濘の中を踏み迷うような苦しい恋の道案内なのであろうか、月光を物思いにふけて眺めるや否やあの人への恋心が生じてきたことよというもので、「恋路」は「小泥」の掛詞である。「恋路」に迷うのは初恋の頃である。

右大臣家百首内、初恋

まだしらぬ恋路にふかく入りしより露分衣濡れぬ日はなし

(林葉和歌集、恋歌、六六七)

「しるべ」は、

恋

やまもりよふみ見ぬみちにしるべせよいづれか人にあふさかの

せき

(忠盛集、一二八)

のように迷っている人を導くもの(人)であるが、月を「しるべ」とした歌に、

わしのやまのどかにてらす月こそはまことのみちのしるべとは

きけ

(成尋阿闍梨母集、一七四)

があり、無明長夜の闇を照らす真如の月を指している。これらの

歌に対して、迷う恋路の道案内を頼むには頼りない涙しかないのが常であった。

百首歌よみ侍りける時、恋の心をよみ侍りける

さきにたつ涙とならば人しれず恋ぢにまじふ道しるべせよ

(千載集、卷十一、恋歌一、六七八、右大臣)

忠度の歌は、月光を相手に顧みられない辛い恋に心が乱れ分別を失っている自分を救い導いてくれる超越的な存在と見ている。

(5) 遍昭寺にて、人人月見侍りに

47あれにけるやどとて月はかはらねどむかしのかげは猶ぞゆかしき (風雅集、卷六、秋歌中、六三三。治承三十六人歌合)

歌意は、荒れてしまった僧房といつても射す月は昔と変わらなけれど、昔のままの月光はやはり引かれることだというもので、荒廃した遍昭寺を照らす月光に深い懐旧の情を覚えている。

「むかしのかげ」は勅撰集では、

としをへて君がみなれしますかがみむかしの影はとまらざりけ

り (千載集、卷九、哀傷歌、五六五、藤原道信朝臣。道信集)

が初出で、「影」は「かがみ」の縁語で、今は亡き父の生前の姿を意味している。それに対して、「むかしのかげ」を月と取り合させた歌には、

身のうさに月やあらぬとがむればむかしながらのかげぞもりくる (定家十体、幽玄様、二〇、讃岐)

百首歌の中に、春月

おほろにもむかしのかげはなかりけりとしたけてみるはるの夜
の月

(風雅集、卷十五、雑歌上、一四八八、徒二位家隆。壬三集)

などがあり、忠度の歌と同じく「かげ」は月光の意である。

ところで、遍昭寺を取り上げた歌には、

広沢の月を見てよめる

すむ人もなきやまざとのあきのよは月のひかりもさびしかりけり (後拾遺集、第四、秋

上、二五八、藤原範水朝臣。金葉集三奏本、第三、秋、一六七)

がある。範水が藤原定頼を同伴して遍昭寺を訪れてこの歌を詠んで定頼の父の公任に絶賛されたのが、この寺が月の名所になった謂われたとされる(袋草紙、十訓抄)。さらに平安末期には、

すだきけむ昔の人はかげたえてやどもる物は有明の月

(新古今集、卷十六、雑歌上、

一五五二、平忠盛朝臣。忠盛集、一一三、初句「すみきけん」

いにしへの人はみぎはにかけたえて月のみすめるひろ沢の池

(新千載集、卷十七、雑歌中、一八五〇、従三位頼政。頼政集)

などのこの寺で月を見て詠んだ歌があり、両者とも、

河原院にてよみはべりける

すだきけんむかしの人もなきやどにただかけするは秋の夜の月

遺集、第四、秋上、二五三、惠慶法師。新撰朗詠集。惠慶集) (後拾

を本歌としている。忠盛や頼政の歌の「かけ」は、姿の意で、人と月を対比しながら人生の無常さ、自然の悠久さを実感している。

忠度の歌も忠慶の歌を本歌とし、荒廢した河原院で歌を詠む忠慶の姿と今遍昭寺で歌を作る自分の姿を重ね合わせて、昔の範永と公任の故事を思い起こしながら僧房を照らす月光に懐旧の情からくる親近感を抱いている。

なお、『本朝無題詩』には遍昭寺を取り上げた詩六編が、また『本朝続文粹』には藤原美範の「八月十五夜於遍昭寺詠月詩一首并序」が載っており、平安後期の詩歌の世界において廃寺遍昭寺の月への関心が高まっていたことがうかがえる。

四

『忠度集』の花と月の歌は、自然への賛歌である。散る花（一二番の歌）や沈む月（四四）に寄せる深い愛着心、『万葉集』の名所を万葉語を用いながら歌った古代と変わらぬ普遍的な美の世界への詠嘆（一三、四三）、旧跡の花（一五）や月（四七）により誘われる懐旧の情など、花と月を愛でる限りない風流心に溢れている。恋情（二二、四三）や有限の人生へ嘆き（八二）といった人生への感慨も、花や月に仮託して巧みに歌っている。また表現の面でも、本歌取り、見立て、擬人法、倒置法、掛詞などを多用し、伝統的な歌語と斬新な表現を駆使して詠んでいる。

大井善壽氏は、『忠度集』の歌題の整理と配列は、「主として『堀

河百首』に従い、『永久百首』『久安百首』に依って補な」つたと言えるとき、さらに『堀河百首』からの影響は、「構成の面のみではな」く、和歌全体に及んでいると指摘されている^{（正）}。右の忠度の花と月の歌においても、二二、四二、四三、の歌には、『堀河百首』の明らかな影響が認められる。同時に、忠度の歌からは、一四の『別雷社歌合』や一五の『為業歌合』の歌のように、歌合の場で『万葉集』を初めとする先人の和歌を学び研鑽を積んだ様子も伺われる。

無常の現世における花と月のかもし出す一瞬の輝きを巧みに把握しようとした忠度の歌は、彼の自然と人生に対する深い凝視から生まれたものである。そしてそこには、実感を重視しながら伝統を踏まえて新機軸を出そうとする描写の手法によって、花と自己、月と自己とが一体化した昇華された世界が創造されている。

注

『忠度集』一五の「さざなみや」の歌は、『岡大國文論稿』第二十二号の「平忠度の懐旧の情を詠んだ歌」で論じたので、省いている。

(1) 『堀河院百首和歌全釈』（笠間書院 平成九年二月）。

(2) 『歌枕歌』とは辞典（角川書店 昭和五十八年十二月）。

(3) 『月水攷——影見し水をまづ氷りける』の展開——（藤岡忠義編『古今和歌集連環』和泉書院 一九八九年五月）

(4) 『忠度百首』小考——『堀河百首』との関連において——（『國語国文』四十八巻五号 昭和五十四年五月号）

（せら もとき 元 高校教諭）